た凹地に生育しているオオヤグルマシダを見つけた．40数年来の念願のシダに出会うことができ感慨無量だった．デジカメに証拠写真を撮り一枚だけ葉をとり翌日先生宅を訪ねた．先生はとても喜ばれその笑顔が今でも忘れられない．そして「サクラジマイノデは見つからなかったか」と尋ねられたので私はびっくりした．「次に行ったとき探してくれ」と話され，これが先生からの最後の宿題となった．ところが今年（2008）に入り桜島・昭和火口が突然爆発して入山できるか心配である．

先生とお会いした最後の日は，年末年始を主治医の病院で過ごされ，吉野の自宅に帰られる今年1月8日だった．とても喜んでおられ「まだ元気で大丈夫だよ」と話されたが，体調を心配していた矢先の1月22日朝先生の訃報の連絡を受けた．先生は「まだ頭はぼけていないから植物の研究をもう少し続けたい．植物の世界は知りたいことが山ほどあるからね」と，口癖のように話されていた．約束通り百歳を超えるまで元気で植物の研究を続けられ，私たちを指導して下さった．吉野の自宅をお訪ねしたときはいつも植物標本の同定をされていて，その姿は誠にすばらしく言葉で表現できない思いであった．このような偉大な先生をそばに持っていた我々はとても幸せだった．有り難うございました．先生の長年にわたるご業績とご指導に敬意を表し心よりご冥福をお祈りいたします．

（890-[redacted] 鹿児島市[redacted]）

堀田　満：初島住彦先生のなされたこと
Misturu HOTTA: Dr. Sumihiko HATUSIMA

2008年1月22日，101歳と4ヵ月で初島住彦先生は御逝去された．長寿の方が多かった日本の植物分類研究者の中でも特に長生きをされただけでなく，90歳を過ぎてからも九州や南西諸島の植物に関する論説をつぎつぎに報告をされてきた．さらに初島先生のお仕事の総まとめとも言うべき「九州植物目録」は先生が98歳のときに印刷出版されたが，「色々と間違いがあるのでなるべく早く改定したい」と訂正の準備もされていた．しかしその願いはかなえられず，胆管癌でお亡くなりになられた．

先生は，1906（明治39）年9月11日に島原半島で生まれ，鹿児島高等農林専門学校をおえられ1928年に九州帝国大学農学部林学科に入学，1931年に卒業された．同年4月には同大学助手，1934年4月に講師，そして1942年10月には助教授に任じられた．将来を嘱望された研究者であった．

ボイテンゾルグ時代　太平洋戦争で，日本軍は蘭領東インド（現インドネシア）に侵攻し，ジャワを占領した．そこの有名なボイテンゾルグ植物園と植物標本館（現インドネシア．ボゴール植物園）に1942年11月には陸軍司政官（ボゴールでの身分は軍属であった）として勤務を命ぜられ，主として木本植物の分類学的研究に尽力された．植物園長は東京帝大の中井猛之進教授が，また博物館長には金平亮三九州帝大教授が着任され，植物関係の同僚としては京都帝大の大井次三郎博士が任務につかれた．大井先生は主に草本類（カヤツリグサ科やイネ科など）を受け持たれて，3年足らずの短い期間であったが，収集されていた標本の整理，同定を初島先生と協力して精力的に進められた．所蔵されている多くの標本に両先生の同定ラベルが貼られているが，日付けを見ると敗戦が確定的になってからは死にものぐるいで同定を進められたようである．敗戦とともに中井先生を始め日本の研究者は，捕虜収容所に抑留され，港での人足作業に従事させられたという．

初島先生の2万種におよぶニューギニア植物の完成された目録やブナ科などの木本植物の分類などの研究結果を書き留めていたノート類は，残念なことに軍に没収されてしまった．そして初島先生も大井先生もジャワでの研究成果を論文にすることはごく僅かだった．

しかし中井先生は，その「正確無比」な記憶に基づいてコンニャクやバナナの大きな論文を書いておられる．初島先生の，論文にならなかった重要な発見としてブナ科の新属の発見がある．カクミガシ属 *Trigonobalanus* は，E. J. H. Corner らが1961年にサバのキナバル山で採集した標本に基づき，1962年に L. L. Forman が「ブナ科の系統進化の鍵ともなるカクミガシ属」として記載した．ところがセレベス（スラエシ）で採集され，ボゴールに所蔵されていたカクミガシ属標本に，1945年に「これはブナ科の新属」と同定ラベルに正しくノートされていたのは初島先生であった．しかしこの重要な新属発見は論文となって学会に報告されることはなかった．初島先生にとっては，1944年から46年までの期間は1編の論文も発表できなかった苦難の時代だった．

帰国から鹿児島への赴任，地域植物相研究　初島先生は 1946（昭和21）年5月に陸軍司政官の任を解かれ，同年10月になって九州帝大農学部附属演習林業務を嘱託され，1947年2月には同大学農学部講師となられた（助教授のポストは他の教官で占められていた）．そして1948年4月には鹿児島農林専門学校（現 鹿児島大学農学部）教授として，鹿児島に赴任された．その後は60年以上におよぶ九州から南西諸島地域の植物相の研究を進められる．1949年の国立学校設置法による新制大学の発足に伴い，1950年4月には鹿児島大学教授となり，1972年3月31日に停年退官された．引き続いて同年4月に琉球大学理工学部教授として沖縄に赴任され，1975年4月には琉大を退官された．先生は約25年以上の永きにわたり，南九州や南西諸島地域の大学での教育と研究の発展に大きな貢献をされてきただけでなく，大学を退官後も30年以上もの長きにわたってこの地域の植物相の解明につくされてきた．

初島先生は，鹿児島大学農学部の生え抜きの教授でありながら，評議員にも学部長にもなられなかった．そうした社会的名誉にはおよそ無関心で，山野を駆け巡り，植物の研究に楽しく熱中されていたように見受けられる．同僚の先生がたもそのような「研究ひとすじ」とも見える初島先生を少々呆れてみておられたのではないかと思われる．しかし林学科に所属していたから仕方なかったのだろうが，1956年6月よりおよそ12年もの間，農学部附属演習林長として演習林の管理経営に努力されると共に，多くの研究成果を発表されている．

生涯の三つの時期　初島先生の「九州植物目録」が印刷発行されたのは2004年11月のことであるし，お亡くなりになる前年にも2編の論文を発表されている．また晩年になっても，読書や校正，あるいは植物の観察にも老眼鏡をほとんど用いられなかったほど，眼はしっかりされていた．記憶も全然ぼけておられなくて，「九州植物目録」のような大部のデータを，カードもパソコンも使わずにまとめられていた．手紙の裏や段ボールの切れっぱなしにちょこちょこと書かれたデータは見つかるが，きちんとまとまった原稿は見つからない．データは体系たてて脳の中にしまわれていたのだろうか．

初島先生の101歳をこえる長い生涯を，研究内容の側面からまとめると，およそ次の3つの時期が認められる．（1）1931–45年　九州帝国大学からボイテンゾルグ植物園時代（戦前・戦中時代）．金平教授と共に採集し “The Kanehira–Hatusima 1940 collection” と呼ばれているニューギニア標本やボイテンゾルグに所蔵されていたマレーシア関係の多くの標本などの熱帯木本植物の分類学的研究が中心の時期．（2）1947–80年　鹿児島大学農学部から琉球大学理工学部時代（戦後の時代Ⅰ）．九州南部から南西諸島地域の植物の分類学的な研究を行い，植物相の解明につとめた時期．「琉球植物誌」や「日本の樹木」などの著書がまとめられた．（3）1981–2008年　80歳を過ぎて悠々と仕事をされた時期（戦後の時代Ⅱ）．九州各県の植物同好会の指導と組織体制の確立，「九州植物目録」執筆出版が行われた．

これらそれぞれの時期に発表された著書・論文や報告の点数を年ごとにまとめたのが図1である．44年から46年の空白期は第二次世界大戦と敗戦の混乱期で，それに続く47年から52年も，各年に1報の論文しか発表がない．初島先生は大変多作な研究者であるが，戦中

戦後はそれであってもほとんど研究が中止されるような事態になったのである．学術研究に対する戦争の影響が，いかにひどいものかが判るデータである．

定年退官のあと　もう一度の発表件数の空白期は先生の70歳代になって始まる．鹿児島大学定年の前年に「琉球植物誌」(1971) が印刷されたことから始まり，琉球大学退官の年には「琉球植物誌」(追加訂正) (1975)，そして樹木学的研究のまとめのような「日本の樹木」(1976)，最後まで改訂に努力されていた「琉球植物目録」(1977，天野鉄夫氏と共著)，それに「鹿児島県植物目録」(1978)，「植物相の由来」(1980，木崎編「琉球の自然史」) と生涯の仕事を取りまとめるような著作や目録を毎年のように発表され，その後に1980年から83年までの 4 年間の発表の空白期が始まる．その年令に近付いたものの勝手な想像だが，病気のこともあって「おれの仕事はやれやれこれで終わった」と考えられたのかも知れない．

しかし「ぼけ」ているわけにも行かなかった，というより「ぼけ」るような先生ではなかった．当時，県北部や薩摩半島からは鹿児島県植物同好会の丸野敏勝さんやメンバーの人々の活躍で，温帯系のヤマシャクヤク，イヌブナ，イワザクラなど多くの鹿児島県新産植物が発見され，「鹿児島県植物目録」の全面的な改訂が必要になってきた．改訂版は56ページ（ページ数で約 2 割）もの増加を伴って1986年に出版される．また九州各県の植物研究会（同好会）が組織化され，そこからの同定依頼や同好会誌への執筆依頼も減らなかったし，それにたいして初島先生は真剣に対応されていた．またこの時期は昆虫，特にチョウ類研究者から東南アジアで採集してきた食草の同定依頼も多かった．どうしたものかと思う食草の標本が多く残されていた．東南アジア熱帯の葉だけの不完全標本を同定できる人は，先生以外に考えられなかった．その同定の成果は五十嵐・福田『アジア産蝶類生活史図鑑』1–2（1997–2000）という大分な本として東海大学出版会から印刷発行されている．あれやこれやで，80年代後半からは「改訂鹿児島県植物目録」(1986) に続き「北琉球の

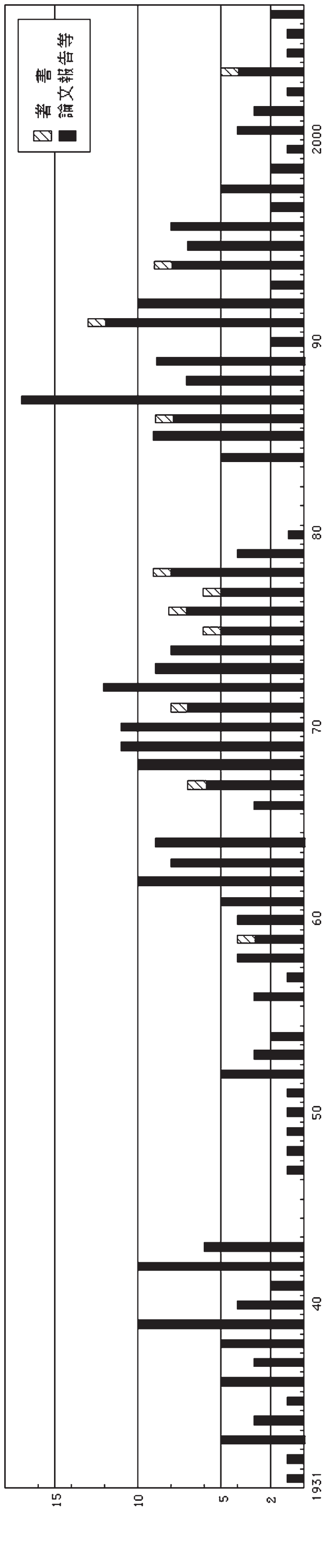


図 1．年ごとにまとめた，初島先生の著書，論文，報告などの点数．

植物」(1991),「増補訂正琉球植物目録」(1994)がまとめられ，さらに先生のところに集積されてきた膨大な九州の植物に関する分布情報が「九州植物目録」(2004)の成果となって現れた．

記載的な植物分類学と標本のコレクション 初島先生は，記載的な植物分類学を基礎にして，ミクロネシアやニューギニアから始まり，九州から南西諸島地域の植物相の研究に多くの業績を残された．学位論文はツゲの分類学的な研究 "A revision of the Asiatic *Buxus*"(1942)で，また森林生態学や造林に関する研究も行われていたが，それはごく少数の論文となっているだけである．若い時代の南洋群島やニューギニアの植物についての研究はその多くが植物学雑誌に発表されているが最後は戦争のために完結しなかったし，膨大な量の西ニューギニア標本のラン科やシダ類の標本は戦災で焼けてしまったり，行くえ不明になった．また研究者として最も充実した30歳代のジャワでのお仕事が，戦争の混乱の中でどこかに埋もれてしまったのも悔やまれる．私の1963–64年のボルネオ調査の時に，なかなか面白いノボタン科のコレクションができた．大井先生が以前ジャワでノボタン科を研究されていたことを知っていたから，上野の博物館の図書課長をしておられた大井先生のところに，院生の分際で厚かましくも研究をお願いに行った．ところが「ボゴールのノートがあれば」と言われ，研究を辞退されたのを思いだす．その時に知ったのだが，初島先生も大井先生も研究者として一番油の乗り切った時期の仕事を戦争のためになくされていたのだった．

戦中戦後の大変な時期について，先生は特にお話になることはなかったようである．帰国されて，九州帝国大学に嘱託としてなんとか拾われ，運良く鹿児島農林専門学校の職があって，教授として鹿児島に赴任された．そして新制大学誕生とともに鹿児島大学農学部の教授となられた．初島先生が高等農林の卒業生であったことが幸いしたのだろう．当時の鹿児島大学農学部には，トカラアジサイの学名に名を残されている鹿児島高等農林河越重紀教授採集の標本や日本の民俗植物学のバイブルとも言える「鹿児島民俗植物記」をまとめられた内藤　喬先生(鹿児島高等農林／鹿児島大学文理学部教授)らが集められた九州や南西諸島の標本だけではなく，これらの先生が留学のときに集められた多数の外国産標本を含む植物標本，あるいはマニラとの標本交換で集められたフィリピン植物の標本などが3万点ほどあった．それを核にして初島／迫コンビによる標本が加わり，あるいは学生達による採集品，さらには各地のアマチュアによる採集品が鹿児島大学農学部に次々に集積されてきた．それが現在，鹿児島大学総合研究博物館に所蔵される，いわゆる「初島コレクション」と呼ばれる植物標本である．多くのタイプ標本(まだ充分に解明されていない)を含み，九州から南西諸島地域の植物相の研究にとってはかけがえのない重要なコレクションになっている．

目録つくりと鑑定 70年にもおよぶ研究生活の中で初島先生が発表された著書や論文は膨大な量になっている．著書が14冊，論文，報告，雑文などは340編あまりになる．これら膨大な著書や論文のもっとも目につく特徴は，ごく短い新種記載の論文や調査した地域の植物目録が圧倒的に多いことである．初期の九州帝國大学臺灣演習林植物調査(1933)や黒髪山植物目録(1933)から始まり，晩年の「九州植物目録」(2004)にいたるまで，実に多くの目録が毎年のように発表され続ける．別刷りを整理していると「よくここまで目録つくりをされたものだ」と感心する．鹿児島では毎年恒例の小学生や中学生を相手とする夏休みの採集品の鑑定会(名付け会)での様子を見ると，先生はとても楽しそうであった．分類群の鑑定に熱中され，名前を決定することに限り無く快感をお持ちになっていたようにも思える．しかも個々の植物の形態の特徴や，分布地点についてのデータの記憶が晩年までとてもしっかりされていたから，鑑定結果は信頼出来るものであった．

また監修された本は20冊をこえる．初島先生は卒業生や九州のアマチュア関係の方々が出版される本の監修を，頼まれると断りきれずに，鋭い同定眼で丁寧になされていた．

標本収集の癖　初島先生は気になる植物を熱心に集める習癖があった．残されていた標本の整理をすると，何に熱中されていたのかよく判る．キブシをとても気にかけられていて，卒業生や地方採集家からのキブシ類の標本がたくさん集められている．キブシ類は標本がよく虫害にあう植物で，あまり良好な状態ではなかったが，その枚数は半端なものではなかった．また晩年に熱中された植物の一つにヨモギ類がある．「九州植物目録」には25種 6 変種ものヨモギ類が記録されている．そのうちの14種，半数以上は帰化植物，その多くは最近の道路法面吹き付けで中国大陸から侵入してきた帰化種である．鹿児島でも一つの法面に 3 種類，ときには 5 種類ほどもの帰化ヨモギを見ることができるが，その種類はさっぱり判らず困っていたのである．初島先生はそれをどうやら明解に鑑別されたようである．数百枚以上（正確には算定していない）ものヨモギ類の標本が残されているが，ヨモギ類についてのまとまった論文は残されていない．だからどういう形質を基準にこの鑑別をされたのかは良く判らない．「最近九州で発見された日本新産の東亜大陸系帰化植物」（大分県の植物，2002）で簡潔な整理がされているが，充分なものではない．

ヨモギ問題の一例にヒメヨモギ問題がある．初島先生が鹿児島大学におられた頃，北薩の米の津川や甑島で塩性湿地に生える高さ 2 メートルをこえる大形のヨモギの一種を採集され，新種と考えて京大の北村先生に標本を送られている．標本は株元から先端まで何枚にも分けて作られていて，「これは新種に違いない」という執念がうかがわれるものだが，返事は「ヨモギ」とされてそのままになったものである．私も気になって米の津川の生育地を調査すると，満潮時には海水をかぶる塩性湿地に，同じヨモギ類のフクドに取り巻かれるように生育する変わったヒメヨモギだった．ナンゴクハマヨモギとして変種か亜種として区別されるべきものだが，今のところ未記載で残されている．ところが，法面吹き付けで中国大陸から侵入したヒメヨモギも各地に見られる．これは内陸部に多くて，ナンゴクハマヨモギほどは大きくはならない．そして多分，日本にもとから生育していたヒメヨモギもあるのだろう．とても錯綜した状況である．九州のヨモギ類の識別には初島先生が収集され，同定された多くのヨモギ類の標本を再整理することが当面必要となっている．鹿児島大学総合研究博物館がその作業を進められることを期待したい．しかし90歳を過ぎてから，老眼鏡も使わず，これだけのヨモギ標本を鑑別同定した執念には頭がさがる．

ややこしい植物群が大好き　初島先生は農学部の林学科に所属されていたから鹿児島で多くの固有群を分化しているツツジの仲間やモクセイ科の樹木など色々な木本植物の分類に精力を傾けられたのは当たり前であるが，それだけではなく鹿児島県には19種類も分布し，そのうち15種は特産種であるというカンアオイ属をはじめ，目立たない花しかつけないサンショウソウの仲間や南西諸島固有のヒメミヤマコナスビ，アマミスミレ，アマミカタバミ，ヒメクリソランなどの草本植物でも多くの新種を記載しておられるし，ハツシマランやハツシマカンアオイのように発見者である初島先生を記念して命名された植物もある．九州南部から南西諸島，南北600キロメートルにわたる鹿児島県とそれに続く沖縄県をくまなく歩きまわり，そこの多様な気候環境のもと，いろいろな程度に隔離された島嶼環境下で生育し進化してきた多様な植物を相手にして，生涯を送ることができた初島先生の101歳におよぶ活動は，幸せな一生だったことだろう．

故郷にも帰らず　初島先生が「松下幸之助花の万博記念賞」を受賞されたのは1997年（平成 8 年度）だから90歳をもうこえておられた．前年に，受賞が決まって数日後に亡くなられ，受賞が断念された中尾佐助先生の例もあって，老齢の初島先生が授賞式に出席できるかどうかが受賞条件として問題になったぐらいだが，その受賞講演で「これで買いたいと思っていた本を買えます．とても研究の励みになります」と挨拶された．それで買われた多くの中国植物誌関係の図書は，晩年のヨモギの研究に役立ったことだろう．九州の南のはしっこの鹿児島は，東京や京都と違って，まったくの情報貧困地域である．いろい

ろといも焼酎を飲む機会はあっても，おなじ分野の研究者と研究について語り合う機会はほとんどない．そして初島先生は飲み助ではなかったらしい．Index Kewensis などと言う植物分類学にとってはもっとも基本的な文献さえ南九州ではなかなかお目にかかれない．そのような環境で，初島先生はこつこつと文献を集められ，研究を展開され，多くの業績を積み重ねられた．初島先生は故郷の島原半島にも帰らず（お骨は島原半島の故郷のお墓に埋葬された），鹿児島で永い生涯を終わられた．九州から南西諸島の植物相の解明に後半生をかけられた先生らしい生涯だった．

初島先生が集められた膨大な標本や文献は鹿児島大学総合研究博物館に寄贈されることとなっている．これら資料が研究に有効に利用されるように整理され，活用されることを願いたい．

なお琉球大学の横田昌嗣教授は「初島住彦博士の業績目録」（1931–2007）を沖縄生物学会誌**46**：5–22にまとめられている．この横田先生の「業績目録」はほぼ完全で，私と丸野敏勝さんとで，初島先生が自宅に残されていた別刷りを整理したが，わずかな追加があっただけである．もし，僅かな追加を加えた業績目録を必要とする人は私に（mitsuru.hotta@mb9.seikyou.ne.jp）メールでお申し込みください．

（890–0063　鹿児島市鴨池 1–5–9
西南日本植物情報研究所）

島袋敬一：初島住彦先生のこと
Kei-ichi SHIMABUKU: Professor Sumihiko HATUSIMA

近頃植物分類学者の方が相次いで亡くなられた．そして2008年 1 月22日朝のこと，電話があり，御遺族女性の方からなくなられたと，満101歳でしたとのこと．暮の頃より点滴を受けておられたとは伺っていた．生前おれは記録をたてるんだと話しておられた．まさに大記録．

先生の御経歴は沖縄生物学会誌14号（1976）に詳しい．昭和17（1942）年徴用されてジャワのボゴール植物園に陸軍司政官として赴任された．そこで旧知の大井次三郎博士（1905–1977）と親交を深められた．やがて終戦となり，使役を課されるようになった．先生はあまり丈夫でない大井博士をいたわって代わりを勤められた．1971年に「琉球植物誌」が出版されたとき，1972年 2 月 9 日の朝日新聞に「先に出されている大井『日本植物誌』と合わせて日本列島の植物誌は一応完成した」と評されている．

先生は運動神経にすぐれておられた．与那国島での採集行でのこと，水牛のそばを歩いておられたら，水牛がモー然と襲ってきた．皆があぶないと叫んだら，走って避けられた．若い時は速かったと話しておられた．

先生は招聘教授として昭和30（1955）年 4 月から約 4 ヶ月琉球大学で講義をされた．その頃は集中講義の形態ではなく，講義のない時には沖縄各地で採集された．その成果は天野鉄夫氏と共著で「沖縄植物目録」として出版された（1958）．大正13（1924）年に出版された坂口総一郎氏の目録以来の快挙である．さらに1967年には「沖縄植物目録」の改訂版が出された．

1977年には目録は稿を改め奄美の植物を加えて琉球植物目録となって出版された．1994年にはその増補訂正版を先生単独で出された．

先生は鹿児島大学では造林学を講じておられた．分類学を講義されたのは1955年の琉球大学で最初と拝察した．ノートを作られ張切って話をされた．

ここで先生の御経歴を簡単に辿ってみよう．昭和47（1972）年鹿児島大学を定年退職され，名誉教授に叙せられた．同時に琉球大学教授に任ぜられ理工学部生物学科に勤務，昭和50（1975）年退職された．在任中は標本室の整備に精力的に取組まれた．

（903-[redacted]　那覇市[redacted]）